

---

**Go ahead. Make my day.**

みえさん。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

G o a h e a d . M a k e m y d a y .

### 【Nコード】

N 2 3 3 4 S

### 【作者名】

みえさん。

### 【あらすじ】

エーリツヒ（ウォールナット）が組織を抜けて以降の物語。

エーリがロシアに着いて三日が過ぎた。

その三日間の殆どはモスクワ周辺の観光名所を巡ることに費やされ、何か用事があってロシアを訪れたというよりも観光目的でロシアまで来たのだろうとホテルの人間はそう思っていた。

実際、エーリは観光を楽しんでいたし、少々ガラの悪いバーに入りする事以外、特別な事をしている素振りを見せなかった。目的を知っている連れでもいたなら、彼の行動を不審がっていただろう。そして三日目の晩に彼の行動の理由を理解して納得しただろう。

その日、エーリはいつものようにガラの悪い場所へ向かっていた。いつもならば、そのままバーに入るはずだったが、その日彼はバーを素通りをしてほとんど人気のない場所へと入っていった。

やがて行き止まりまで来るとエーリは立ち止まって煙草に火を付けた。

「よう、元氣そうだな」

振り向きもせずに言いながらエーリは両手を上に上げた。

「……そのまま何もせず振り向いて下さい。妙な素振りをしたら撃ちます」

憎悪を含んだような神経質な声が聞こえてエーリは少し笑う。

どんな顔をしてこちらを睨んでいるのか、見ずに分かる気がした。実際振り返ってみれば予想通りの厳しい顔をした隻眼の男がこちらを睨んでいた。激しい憎悪と嫌悪感を隠そうともしない顔だった。

黒髪になっているのは追ってくる人間の目を眩ませるためだろう。目立つ目の傷を隠そうとしているのか、いつもの黒い革製の眼帯ではなく、医療用の白い眼帯をしていた。そうすると少し印象が変わったようにも見えたが、顔立ちは見慣れた顔だった。

黄金の翼の幹部にいた男、‘隻眼の鷹’と呼ばれた男だ。

手には小型のオートピストルが握られている。

「煙草、吸っても良いだろう？」

「……………」

男は答えなかったが、エーリがゆっくりと煙草に手を掛けて突然撃ってくるようなことはしなかった。

或いは見境も無くなっているのではと懸念していたが、頭の中はまだ「正常」に保っているようだった。

「俺に何の用だ？ 探していたんだろう？」

「……お嬢様が、死にました」

「知っている。ニュースで見た。まさかお前が生き残っているとは思わなかったが」

ロハの表情が憎悪に揺れる。

「貴方のせいですっ」

エーリは分からないと言う風に首を振った。

「俺のせいだと言われても納得出来ない。あのお嬢ちゃんが勝手に選んだ事だ」

「ですが、貴方が行方知れずにならなければお嬢様は……っ！」

ぎり、と奥歯が鳴る。

こういった表情を見るのは初めてかもしれない。だが、エーリは彼がこういった表情を持っていることは初めから知っていたような気がした。冷静さの下に、彼はいつもこの表情を押し込めていたのだ。

ロハは冷静な男だった。人当たりが良く穏やかで組織内では「外交」を任せられるような男だった。その下にどんな表情を隠しているかと、常に冷静な判断が出来る点はエーリも彼のことを評価していた。ただ、信念があるガイルとは違い彼には何もない。彼にあるのは「お嬢様」だけなのだ。

もしも、同じ物を目指していたなら少し変わっただろう。だが、彼の目指したのはお嬢様の希望をかなえることだけ。だからロシア作戦の時に生き残ったのがガイルではなく彼だと知った時、もう組

織は駄目だと思ったのだ。

エーリは煙草の煙を吐き出す。

「俺が残った所で何も変わらなかった。俺は何もしなかった。嬢ちゃんのやることに手出ししなかった。結果、俺がここに存在しない可能性があるだけで現状に代わりはないはずだ」

「そんなことは、実際に貴方が組織に残っていなければ分からないことです。貴方がお嬢様を見捨てず、残っていたなら、お嬢様は助かったんだ」

「理論が破綻している」

エーリは煙草をふかしながら、ゆっくりと彼に一步近づいた。

彼は少し後退する。

「俺は自分がしたくないことは死んでもやらない。だからお前が言っている可能性は起こり得なかった」

「そんな子供みtainな理論、この社会で通じると思っているんですか！」

「この社会だから通じるんだよ。自分の信念曲げてまでやるだけの価値が見えなければ無意味なんだよ。……そんなこと、信念の欠片もないお前に言ったところで理解しないだろうな」

「うるさいっ！ 貴方に……人を本気で好きになったことのない貴方に何が分かるんですか！」

「……」

「私にはお嬢様が全てだった。裏切られて、片目を失って、拾われてあのお屋敷に入った時から、私にはお嬢様しかいなかったんです。それを失うことがどんな気持ちか貴方には分からないでしょう。フリーダさんが亡くなった後、屋敷で笑って過ごしていた貴方なんかには！」

「わからねーよ」

エーリは煙草を地面に落とす。

跳ね返った吸い殻を踏みつけて、冷たい表情を口ハに向ける。

「……人を本気で好きになるって何だ？ 大切なヤツが死んで、全

てを恨んで復讐するのが愛か？ 毎日暗い顔をして泣いていれば良かったのか？ 後を追って死ねば良かったのか？」

エドを失って、一人が耐えられずラリーの屋敷に厄介になることになった。屋敷の中で修繕作業をしたり、屋敷に住んでいる女中や執事をからかって遊んだ。

復讐する気なんて起きなかった。突然すぎて涙すら出なかった。死のうと考えなかった訳ではないが、彼女の泣き顔を見るような気がして出来なかった。それで生きるにはそうするしかなかったのだ。エドのおかげで安定した気持ちだが、また崩れてしまう前に、立ち上がる手段を探すしかなかったのだ。

そうしなければ死よりももっと深い場所に落ちてしまう気がしたのだ。

「俺は確かにラリーから後見人を引き受けた。約束はお嬢が成人するまで。それ以降は、お嬢が決めればいいと思っていた」

選ばなかったのは彼女の方だ。

それでも万一自分が必要になる可能性を考えて、エーリは彼女が成人しても暫く傍らに残った。諫める立場にあるガイルがいたからだ。ガイルの言葉に耳を傾け、考えを変えることがあったならエーリの力が必要になるだろうと思った。けれど、結局ガイルは殉死し、彼女の言葉に唯々諾々と従う彼しか残らなかった。

「……お前はラリーが誰のために俺をお嬢の後見人に付けたと思っている？」

「どういう意味ですか？」

「ラリーがあの子の名前に、‘ユートピア’、という名称を使ったのはどうしてだと思っ？ どうして俺が、ウォールナットと呼ばせたいと思う？」

ラリーが息を引き取る瞬間に立ち会っていなければ、エーリも誤解していただろう。ラリーはエーリに自分の娘を託すことでエーリに、‘生きる理由’を残そうとしたのだと勘違いをしていただろう。でも、それは違う。

あの時、彼は言ったのだ。  
すまない、と。

その言葉が真理だった。だから親友の最後の我が儘を聞いてエーリはそこに留まっていたのだ。

「先代は……自分の理想を形にするつもりで組織を作った。それ以外に、何かあると言うんですか？」

「理想、ね」

「先代はいつも言っていました。この世界を少しでも争いのない世界にしたいと。そのために私たちは戦ってきた。お嬢様はその意思を継がれた。貴方が後見人になったのはお嬢様をお守りするためでしょう」

「……だから、お前じゃ駄目だったんだ」

男の瞳に怒りが燃え上がる。

「何が言いたいんですか」

「お前の考えが、レイアを殺したんだ」

「っ……！」

耳を劈く鋭い音を立てて、エーリの真横を銃弾が通過する。

硝煙の匂いが立ちこめている。耳の辺りが少し熱い。

エーリは真っ直ぐ男を見つめた。

彼はただ、怒りに肩を上下させながら、白い煙を吐く短銃を握っている。

元々ライフルでの狙撃を得意としていた男だが、この短距離で外す訳がない。恐らく動揺が勘を鈍らせたのだろう。エーリに当たるはずの銃弾は、真後ろの壁にめり込むようにして止まった。

「もう一度……言って、見ろ。今度は、その目、撃ち抜いてやる」

「やってみろよ。だが言っておいてやる。お前は絶対に後悔する」

「貴方を殺して私が後悔するとも言いたいんですか？」

「……お前、その顔でお嬢に会えるのか？」

「………！」

凶星を突かれたように彼は固まった。

死ぬつもりだったのだろう。

エーリを殺して自分も死ぬ。最初からそのつもりでエーリを捜していた。組織を復活させたいとか、そんなのは口実だっただろう。エーリを挑発しておびき寄せて心中するつもりだったのだ。

「お前はお嬢が死んだことよりも、自分が生き残ったことの方が辛いんだろう。だから、誰かを恨まずにいられなかった」

「はっ……そんなことを言って私を動揺させるつもりですか？」

「どうとつても構わない」

彼だって本当は気付いているのではないだろうか。

自分が妄信することで、彼女の歩むスピードを速めてしまったこと。本当は立ち止まって振り返るべき時に振り返らせず、背を押してしまったのは、ロハが彼女を信じて止まなかったからだ。

挑発するように、エーリは笑う。

そして英語でゆっくりと付け加えた。

「Go ahead. Make my day.」



「Go ahead. Make my day. (やんならやれよ。楽しませてみる)」

「！」

挑発に乗ってロハが銃を構えた。

その時だった、恐らく最初の発砲音を聞いて見に来たのだろう。若い男が路地を覗き込んだ姿が見える。男は銃を握った男に驚き、小さく悲鳴を上げて後退した。その足が、路地に転がっていた空き缶を蹴飛ばす。

かん、という物音に驚いてロハが振り返った。

そのチャンスを一エーリは見逃さなかった。

素早く回り込み、撃鉄を固定するように親指を突っ込む。驚いてロハは引き金を引いたが抑えられている為に雷管に振動が伝わらない。銃を諦め、ロハの足が一エーリの脇腹を狙う。

だが、その攻撃が一エーリに加えられるよりも速くエーリの足がロハの軸足を薙ぐ。

バランスを崩し、地面に倒れ込むロハを一エーリは簡単にねじ伏せ頭部を抑え、そのまま拳銃を男の頭部に突き立てた。

こんな簡単に踏み込ませてしまうのは彼らしくもない。

訓練を怠っていたのか、それとも。

ちらりと確認すると、先刻の若い男はいなくなっている。巻き込まれることを恐れたのかそれとも警察を呼びに行っただのか分からない。早めにこの場から離れるのが賢明だろう。

エーリは少しため息をつく。マガジンキャッチを押して弾倉を落とすと、自動小銃のカートリッジが落ちて路地に音を響かせた。

抑えられたままのロハがじろりと睨む。

それを冷たく見下ろしてエーリは言った。

「死にたいなら一人で死ねよ。俺を巻き込むな」

「知った風な口を聞くな！ 貴方なんかに、私の気持ちなんか分かる訳がない」

「理解することもされることも拒む言葉だ。だから、お前は駄目なんだ。……ラリーがどんな思いでレイアにユートピアを残したのか、絶対に理解できない」

「何を……」

「クルミの木の下では他の木は生長しない」

エーリは短く言う。

ロハは分からないと言う風にエーリを見た。

彼の上にのしかかったまま、エーリは二本目の煙草に火を付ける。

「確かにラリーは、子供達が大人の勝手で傷つかずにすむ世界、を望んでいた。そのためのユートピアだった。でも、レイアに組織を残したのは少し意味が違う」

「……意味が分かりません」

「理想を引き継いでくれなんて、ラリーは思っていなかった」

引き継いでくれなくて良かった。あの親友はただ、レイアが生きてさえいてくれれば、笑ってさえいてくれればそれでいいと思っていた。彼女の理想を現実にするための組織であればよかったのだ。

なのに彼女はいつまでも父親が思い描いていた理想を追い求めてきた。

結局彼女は何かを考えているつもりで、何も考えていなかったのだ。

それはロハも同じ事。

どちらも「大切な誰か」の理想ばかり見て、自分が本当は何を望んでいるかを見てこなかった。彼女が答えを出せたら、エーリは逃げる道でも戦う道でも手助けをすることが出来た。そのためにラリーは後見人にエーリを据えたのだ。

けれど、彼女の行動は、組織の意思に飲まれながら、次第に過激なものへと変化していった。そして間違った方向に向いたまま、彼女の目標が定まってしまった。ガイルならばそれがどれだけ危険なものなのか彼女に問い、修正することも出来ただろう。実際に何度も彼は諫めてきたのだ。

考えなかったのはレイアの方であり、ロハはそんな彼女を支持するばかりで疑問にも思わなかったのだ。

エーリが口を挟まなかったのは考えるのを止めてしまった彼女を許せなかったこともあったし、何より答えだけ与えてしまえばまた同じ事だろうと思ったのだ。

エーリが言ったから父親がどんな風に思っていたのかを信じてしまう。父親が‘言った’から自分の理想を追い求める。

それでは、同じなのだ。

「自分で考えろ。お前には頭がちゃんと付いているはずだ」

「私は考えています。だから、貴方を殺したかった」

「だったら、どうして俺が組織を離れたと思う？」

「貴方は見捨てたんだ。自分が助かるために。そうでなければ飽きたんですか？ 気分屋の、貴方らしいことだ」

「……だから何も考えていないっていうんだ」

「まだ言うんですか？ 私は自分で考えてそう思ったんです。それにお嬢様だって、そうっしやった。貴方は自分を見限ってしまったと」

エーリは少し目を開く。

「見限る？」

「そうです。だからもう、貴方を捜す必要はないと。……最初は貴方を捜していたんです。でも、ヨーイチが死んだ後、お嬢様は捜すのを諦めた」

エーリは煙草の煙を吸い込む。

長く吐いて、もう一度吸った。

洋一が命を落とした後、彼女は捜すのを諦めた。そしてエーリは

自分たちを見限ったからもう捜す必要はないと。彼女はそう言ったと言う。

「……そうか、最後に、気付いたのか」

喜んでいいのか、悲しむべきなのか、妙な気分だった。

彼女は洋一が亡くなった後、ようやくエーリがいた意味に気付いたのだろう。そして今更エーリが戻っても手遅れだとも判断したのだ。

おそらくその後すぐにあの自爆テロを起こした。自分の行ってきた行動にけじめを付けたのだ。そう考えれば巻き込まれた要人が生き残った理由も頷ける。たまたま助かった訳ではない。彼女は最初から無事に逃がすつもりだったのだ。

或いは自爆するつもりなどなかったかもしれない。世間的にそう片づけられただけで。

ちらりとエーリは口ハを見る。

彼が生き残った理由。

それもようやく分かった。

「……なあ、嬢ちゃん、最後にお前に何か言葉残さなかったか？」

「どう……いう意味ですか？」

明らかに狼狽した色が混じる。

「お前に生きていて欲しいと言わなかったか？　そうでなければ、逃げ延びるようにと」

「……どうして」

それは肯定の言葉だった。

何故、そんなことをお前が知っているのか。

そう問いかけるような声。

「自分で考えろよ」

「貴方は、そればかりだ」

「人から与えられた答えをただ信じるのは、何も知らないのと一緒に。何も考えてないんだ」

「……」

エーリは立ち上がり、カートリッジを蹴飛ばして、逆方向に拳銃を投げる。

「……………貴方は」

半身を起こしてただ地面を見つめながら彼は言う。

「貴方は、少し変わられました」

「違うな、俺は最初からこうだった」

「いいえ、変わられたと思います。……………少なくとも、こんなミスは冒さなかった」

拳銃を構えた気配を感じる。

もう一つ隠し持っていたのだろう。それは、何となくすぐに見当が付いていたことだ。拳銃でなければ小型のナイフか何か。確実に仕留める為には何かを隠し持っていると思っていた。

けれど敢えて探す行動を取らなかったのは、必要ないと判断したからだ。

「甘くなったんじゃないですか、ウォールナットさん。私が、あんな簡単に諦めるとでも思ってたんですか？」

「……お前には撃てない」

「撃てます」

「いいや、撃てない。撃ったところで、俺には当てられない」

「勝手なことを言うな！」

「なら、撃ってみろよ」

エーリは振り返る。

自分に向けられている銃口は目に見えて分かる程に震えていた。

その状況で撃ったところでまともに当たる訳がない。そんなのを理解しない口ハではなかった。

息を荒くして睨み付ける口ハはやがて、力無くその両手を下ろした。

力無い彼の口元には小さく笑みが浮かんだ。

「あなたはいつもそうだ。いつも、そう何もかも知ったような瞳で私を見る。私はいつも、貴方には敵わない」

「そんなことはない」

「貴方が断言したことで違ったことなんて殆ど無かった。だから、貴方さえお嬢様の側にいて、真実を告げて下されば、何もかも変わっていたはずなんだ」

「……俺は神様じゃねーよ」

ロハは自嘲するように笑った。

「神だったら、どんなに良かったでしょうか。貴方が神なら、私は迷わず貴方を殺せたというのに」

エーリは彼を見る。

他の人間を平気で殺してきた男だ。別に今更人を殺すことに怯えた訳ではない。ただエーリの事は殺せない。それは確信できた。

彼は拳銃を持ったままの手で顔を覆った。

「……何故、私は貴方を殺せないのでしょうか。憎んでいるはずなのに、恨んでいるはずなのに、それなのに、私は貴方を殺すことを躊躇っている」

「……」

彼は少し覆った手を外す。

泣いていると思っていたが、彼は泣いてはいなかった。行き場所を失ってしまったかのような瞳が空中を彷徨い、エーリを捕らえていた。

「自分で考えろ、あなたは組織にいた頃から再三私にそう言いました。けれど私は考えることを怠り、お嬢様を失ってしまった。もう、生きていられない、そう思ったのに、貴方の言葉が幾度と無く脳裏を巡り死ねませんでした。私はそれを……貴方を殺せという意味だと思っています。使命だと思っています」

「……過去形だな」

「今は、分からなくなりました。……貴方に会いたかっただけでもしれません」

「男に言われても色気がないな」

二本目の煙草は携帯灰皿で揉み消した。

先刻自分の落とした煙草を拾い上げ、それも灰皿の中へと押し込む。

その様子をロハの瞳がじっと見つめていた。

「……一人は寂しいんだよ」

「どういう……意味ですか？」

「俺は、エドがいるのが当たり前だった。いつか帰ってくる事も知っていたから、一人でいることに寂しさを感じることも無かった。けど、一人は寂しい。あいつが死んで、初めて思い知らされたんだ」  
自分に言われたと思ったのか、彼は首を振った。

「私は……一人じゃありません。まだ、生き残った人間もいます」  
「でもお前は孤独だよ。中枢で生き残ったのはお前くらいだ。だから皆、お前にリーダーであることを望む。誰も対等ではない。お前は誰かに背を任せることすら出来ない」

彼は目を伏せた。

「それは、私が貴方に会いたかった理由ですか？」

「それはお前自身の感情だよ」

「………貴方は」

「ん？」

「今は孤独ではないのですか？」

エーリは薄く笑う。

人は一人で生まれ一人で死ぬ。寂しさを感じていないとしても人は常に孤独だ。

けれど、少なくとも「帰りたい場所」がある。

捨ててしまうにはあまりにも大きすぎる場所。今までは「エド」だけだった。エーリの帰るべき場所はエドだけであり、そしてそれを失ったエーリは親友との約束に縛られて何とかその場に留まっていただけに過ぎない。約束の期限が過ぎてあの場所を捨てた後のエーリはどこかに長く居ることは無かった。

時に名前を変え、髪の色を変え、修復以外の仕事をし生きてきた。今の結社に入ったのも少しの興味からで、またいつか消えてしまおうと思ったのだ。

けれど、いつの間にかあの場所はエーリの帰る場所になっている。失いたくないのだ。もう二度と。

「お前の挑発に乗って、わざわざ会いに来たんだ。分かるだろう」



「……守るためですか？」

「いや、後悔しない為だ」

失って後悔しないために、自分の出来る最大のことをする。守るといふのは後悔しないための一つに過ぎない。

それがエーリの選択。

「……ない、訳ですね」

「何だって？」

「撃てる訳が無いんですね。覚悟が違いすぎました」

遠くから誰かが近づいてくる気配がある。おそらく警官がやってくるだろう。ここは行き止まりになっている。強行突破する以外の道は、死と、多分もう一つしかない。

ロハはぎこちない笑みをエーリに向けた。

「行って下さい。貴方の事だから逃走経路は確保しているんでしょう？」

「ああ。……お前は どうする？」

ロハは立ち上がり銃をいつでも撃てるように構える。

「私は私の道を。……ここを切り抜けたら何か見えるかもしれまん」

「……お前、馬鹿だな」

感慨深げに言ったエーリの言葉に、振り向いたロハは笑って見せた。それは今までに内ほど清々しい表情だった。

「そうみたいです。……いずれまた」

お会いしましょう。

彼はそう呟くように言った。

エーリは答えの代わりに少し笑う。

彼には何も言わず、そこにあった窓を押して開ける。ここは普通の民家だが、住人は外出中であり、玄関から出たとしても人と顔を合わすリスクが少ない家だ。ここから出て東側に向かえば「逃がし屋」と接触出来るようになっていいる。

民家の中に迷わず入り、窓を閉める。

エーリが民家から外に出た時、向こう側から発砲音が響いた。どちらが撃ったのか、誰が撃たれたのかは確認する必要もない。興味もない。

彼は確信していた。この日を境に鷹の噂は聞かなくなるだろうと。結果がどちらだったとしても。

銃声にざわめきだした人混みをエーリは歩いていく。早く帰ろう。

あの場所に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2334s/>

---

Go ahead. Make my day.

2011年4月7日00時11分発行